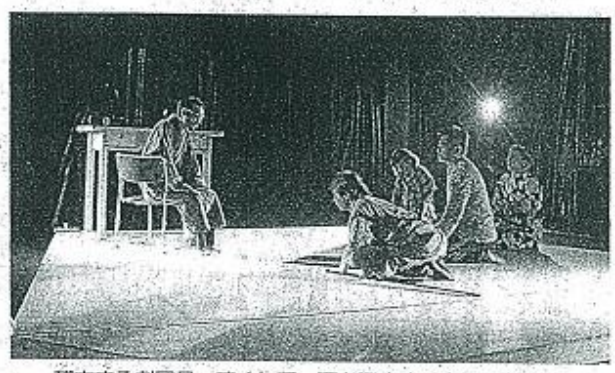
H28 年 6 月　新聞記事（山陰中央新報）

夫婦2人 言葉の交流

演劇「小泉セツと八雲の怪談」

ピッコロ劇団 尼崎で4日開幕

小泉八雲（ラフカディオ・ハーン）と妻セツを描いた演劇「メトミミトヤミ―小泉セツと八雲の怪談」が、兵庫県尼崎市のピッコロシアターで4日から上演される。同県立ピッコロ劇団の第55回公演として、松江を舞台に2人の言葉の交流を描く。5日は八雲のひ孫で島根県立大短期大学部教授の小泉凡さんが舞台で話す。（増田枝里子）



稽古する劇団員。暗くして、耳を澄ますことにこだわる（ピッコロシアター提供）

「怪談」誕生など軸に展開

尼崎市出身の劇作家・角ひろみさん作、同劇団の劇団員で舞台監督の鈴木田竜二さん（45）が演出を手掛ける。

舞台は1891（明治24）年の松江。妻セツの視点から、夫となった小泉八雲との日々、八雲の著作「怪談」の誕生などを軸にストーリーを展開する。

作品が着目するのは、セツと八雲が交わした独自の言葉遣い「ヘルンさん語」。片言の日本語だ。少女時代に豊富な物語を聞いて育ったセツが、八雲に2人の間だけの日本語で物語を伝え、それがその後の傑作「怪談」へとつながったエピソードを描く。

鈴木田さんは「言葉がはっきり伝わらなくても、心の中にある目で相手を見つめる大切さを表現したかった」と強調する。2人の間にあった、見えないが確かにある「ヨキモノ（善意）」を感じたという。

小泉八雲旧居の庭を、今回の演出のモデルにした。暗い場面を多くし、目が悪かった八雲の視界や、目に見えない異世界の雰囲気を表現。ビジュアル（視界）よりも声や擬音などの音に力を入れた。

セツ（左）にもっと話を聞かせてくれとせがむ小泉八雲（ピッコロシアター提供）

鈴木田さんは「他者に対していかに耳を澄まし、目を開いていくべきか、考えるきっかけを提供できればうれしい。いつか島根での公演も実現させたい」と意気込みを語る。

自分と異なる考えの人を排除しがちな昨今の社会を憂い、「人の中にもともと備わっている『ヨキモノ』を信じる力を伝えたい」と語る。

制作過程で、松江市を2度訪れた鈴木田さん。その際、立ち寄った

公演は6月12日までに計6回。5日午後2時からの上演後、凡さんと角さんによるトークを予定している。

全席指定。一般3200円、大学生・専門学校生2500円、高校生以下2千円。問い合わせ、予約はピッコロシアター、電話06（6426）1940。

平成 28 年 6 月 2 日付け・山陰中央新報

『読みメン』になろう

対話型絵本お薦め

父の日がある6月は「読みメン月間」。お父さんと子どもが本を介して絆を強めてもらおうと島根、鳥取両県が定め、「読みメンてちょう」を配布するなど、読み聞かせの推進などに取り組んでいる。おじいさんやお兄さんなどを含め、まだのメン（男性）は一歩を踏み出してみよう。（増田枝里子）

読みメン月間に合わせて設けられている「おとうさんにおすすめ」コーナー＝松江市浜乃木7丁目、おはなしレストランライブラリー

「読みメン」という言葉をつくり、提唱したのは島根県立大短期大学部の岩田英作教授（児童文学）。読みメンデビューに大切な姿勢は「気楽に、子どもと一緒に楽しむこと」という。

読まねばならない、という義務感があるとリラックスもできず、逆効果。肩肘張らずに一度読んでみれば、仕事の疲れも癒やされるかもしれない。

では、どんな本を読んだらいいのだろう。

読み聞かせというと、物語を語る印象が強いかもしれないが、例えば「ねえ、どれがいいの？」（評論社）は、読んであげる、というよりも「対話型」の作品だ。

ページをめくると、見開きいっぱいに四つのイラストが描かれ、それぞれに質問がある。

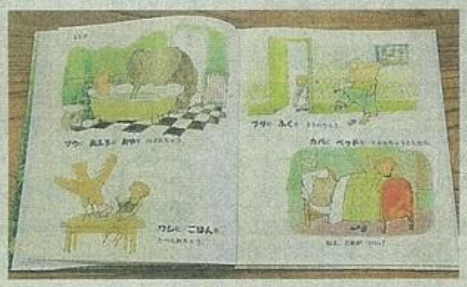
「ゾウにおふろのおゆをのまれちゃう」「ブタにふくをきられちゃう」などの質問を読み進め、「ねえ、どれがいい？」。自分ならどれがいいだろうと、子どもと会話をしながら読み進められるのが楽しい。

「トリックアートおばけやしき」（あかね書房）は、たくさんのだまし絵などを眺めながらクイズを一緒に解いていく内容で、一体感が生まれる。

このほか「お父さん」「おじいさん」が登場する作品は男性向きだろう。擬音が多い作品、虫が出てくる自然科学系作品なども、好む男性は多いかもしれない。

岩田教授の一押しは「す～べりだい」（PHP研究所）。「すべりだい」という言葉が形を変えて登場し、いろんな形の滑り台が出てくる。くすっと笑える一冊だ。

県立大松江キャンパス（松江市浜乃木7丁目）にある児童書専門図書館「おはなしレストランライブラリー」では、6月から、読みメン月間に合わせた「おとうさんにおすすめ」コーナーを設けている。



「ねえ、どれがいい？」の一場面。対話型の絵本なら子どもと会話しながら楽しめる

島根、鳥取両県内の公立図書館などで配布している「読みメンてちょう」も役立ちそう。両県で内容は少し異なるが、メーンはどちらも、読んだ本のタイトル▽読んだ日付▽感想や子どもの様子を記録する「読みメモ」だ。子どもが大きくなるまで保管し、たまに振り返ったり、何年か後にプレゼントしたりするのもいい。

岩田教授は読みメン活動の魅力について、「子どもの成長に気づけたり、読み手である自分自身に新たな発見があったり、メリットはたくさんある」と実践を呼び掛ける。

島根、鳥取両県の公共図書館などで配布している「読みメンてちょう」

平成28年6月12日付け・山陰中央新報

英男性はるばる来松

家系図調査 凡さんの存在知り

「祖先は小泉八雲の父です」

小泉八雲旧居でゆかりの品を眺めるバーネイ・デューリーさん（右）と小泉凡さん

松江市ゆかりの文豪・小泉八雲（ラフカディオ・ハーン）の異母兄弟の子孫で、イギリス人男性のバーネイ・デューリーさん(40)＝ロンドン在住＝が11、12の両日、初めて松江市を訪れ、八雲のひ孫の小泉凡さん(54)と対面した。家系図を調べたデューリーさんが凡さんの存在を知り、知人を介して連絡。松江市北堀町の小泉八雲旧居などゆかりの地を巡り、親交を深めた。（曽田元気）

八雲の父でアイルランド人陸軍軍医だったチャールズ・ブッシュ・ハーンが、八雲の実母と離婚した後、デューリーさんの祖先と再婚している。

ロンドンの出版社で働くデューリーさんは今年、家系図を調べ始めたことから凡さんを知り、インターネットで松江に住んでいることを突き止めた。面会を熱望し、仕事で来日したのに合わせ、松江を訪ねた。

凡さんはデューリーさんの存在を知らず「まさか出会えるとは」と驚いた様子だった。

12日は、凡さんらと旧居をはじめ、同市殿町の松江城や松江歴史館、松江城山稲荷神社などを散策。八雲の松江での暮らしぶりを見聞きし「神話的な世界の人だと思っていたが、近くに感じることができた」と満足顔で、ロンドンと違い、静けさの漂う松江の町並みが気に入ったという。

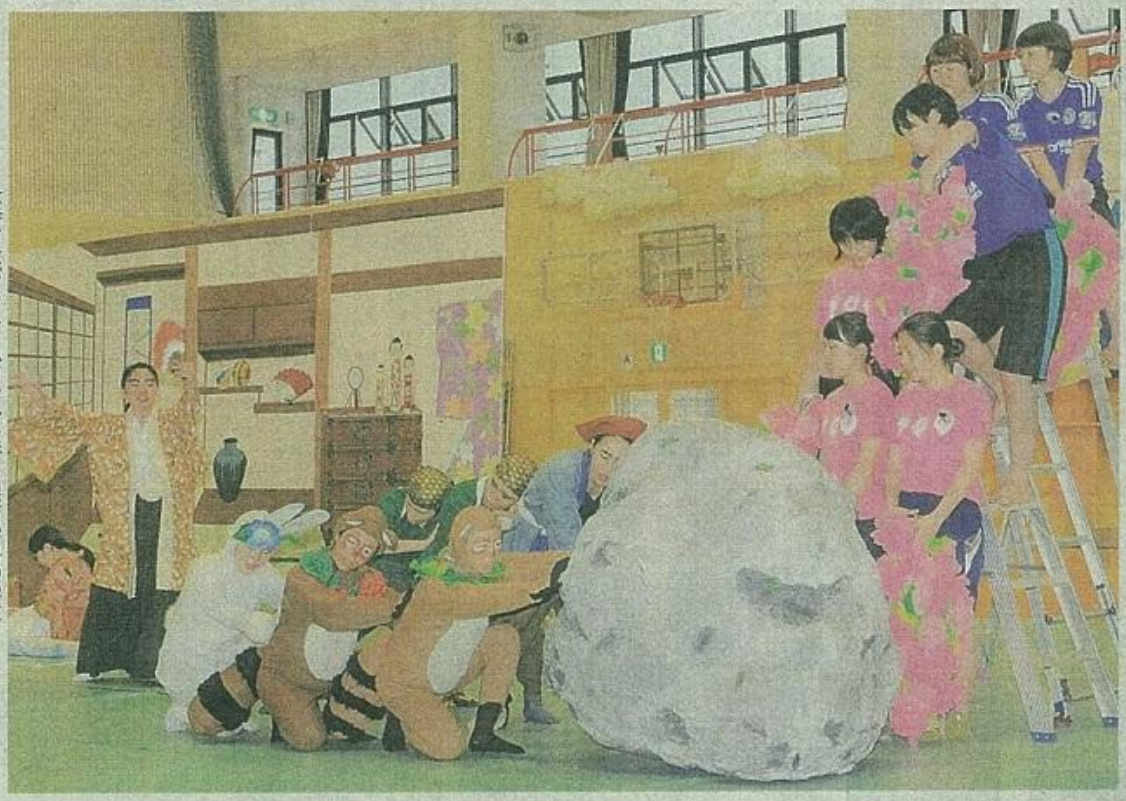
凡さんによると、八雲の父チャールズの写真は2枚しか確認されておらず、デューリーさんに探してもらう考え。「写真があれば貴重な史料になる。メールでやり取りを続け、また会いたい」と、今後の交流に思いをはせた。

松江

平成28年6月14日付け・山陰中央新報

初の出雲開催 入念準備

県立大短大部恒例・ほいくまつり



本番さながらにリハーサルを行う保育学科の学生

県民会館改修工事 劇や歌「楽しんで」

松江

県立大短期大学部（松江市浜乃木7丁目）の保育学科の学生が、25日に出雲市塩冶有原町2丁目の市民会館で、劇や歌を披露する「ほいくまつり」を開く。40年以上続く伝統行事だが、従来会場にしてきた県民会館（松江市殿町）が改修工事のため、初めての出雲公演となる。楽しい時間を親子に届けようと、1、2年生106人が仕上げの練習に励んでいる。

（岸本翔太）

学習成果の発表と地域貢献を目的に、1974年から毎年開催。今回は現2年生が2015年12月から準備を進め、新入生を迎えた16年4月以降に本格始動した。全学生が劇や舞台装置、照明、音響、衣装など11パートに分かれて、舞台をつくり上げる。

当日のステージは歌唱「海の冒険隊」、司会「ゴリラの親子愛」、影絵劇「ピノキオ」、劇「ききみみずきん」の4演目で構成。「ききみみずきん」は、主人公のおじいさんが動物の声が聞こえる頭巾の力を借り、長者の娘の病気を治す昔話にアレンジを加え、ユニークな作品に仕上げた。

舞台に携わる学生はリハーサルを重ねて本番に備え、広報担当の学生は手作りのポスターやチラシを出雲市内の保育園などに届け、周知を図っている。

実行委員長の青山陽香さん(19)＝2年＝は「初めての出雲開催で不安はあるが、迫力あるステージで来場者に楽しんでもらいたい」と意気込みを語った。

まつりは午後2時半開演。入場無料。

平成 28 年 6 月 21 日付け・山陰中央新報